

幼稚園の時期にどれだけのことを期待できるか

幼稚園卒業期の子どもの

劇あそび



桃の節句が近づき柔かな春の陽さしも感じられる頃になると、年

長組の子どもの生活は、幼稚園の卒業そして小学校への入学という

一大画期が目前にきているので、どことなく気ぜわしい毎日となっ

てくる。子どもたちは三学期もなかばを過ぎると一日一日と過ぎて

いくその日々を惜しむかの如く、そして幼年期のあそびの総仕上げ

であるかのように、すっかり勝手を知りつくした園の中を縦横無尽

にかけめぐって遊びにひたり、全身で卒業の喜びを待ちうけている

反面、心のどこかにはやはり二年なり三年なりの毎日通った幼稚園

をもう巣立っていく時期が来たことへの深い哀愁、これは多分、教

師や親の気持を敏感に感じとることからきているのであるが、そ

んな気持ももっているようにもみられたりする。教師の側は、アル

バムの整理などにいそがしく追われながら、入園当初の幼なかった

村 石 京 子

写真をみてはその当時手がかかって困ったことを思い出し、その一人ひとりがこんなに明るく立派に成長してくれた現在がうれしかったり、手ばなすのがおしかったりという複雑な気持におそわれる頃である。

この時期には、私どもの園では毎年の恒例になっているが、卒業の二組の子どもたちは三月三日のひな祭りの集りを主催するという子どもたちにとっては大へん大きな事業ととりくむのである。このときは、プログラム書きから司会、そして内容はうた・劇・人形芝

居・紙芝居・楽隊ごっこ・その他と種々な出し物を考えて自分たちで会をもち、お母さまたちや小さい組の人たちを招待して楽しい一日を過ごすのである。今回、卒業期の子どもの劇あそびという題をいただいているが、ちょうど時期からいってこのひな祭りの催しのときに入れられる劇あそびがそれに当てはまるかと思われるが、そのことに入る以前に順序として、卒業期になるまでの子どもたちの劇あそびの経験というものが、日常の保育の中にどのような形でもり入れられてきたかについて述べてみたいと思う。

「劇あそび」というものは、常日頃子どもたちの自由あそびの中にかなり大きな比重で入っている場合が多い。それから一方には、教師の意図から進められた劇あそびもある。前の例は、子ども同士の交友関係が緊密になりグループあそびの発展する時期、そして、「劇」というものの概念が、今までに人のするのを見たり、または実際にやったりという経験によってできているような時期に多くみられる。例えば、七匹の小羊とおおかみ・白雪姫・シンデレラ・三匹の小ぶた・赤ずきんのような子どもストーリーを知っているような題材を自分たちで選択して、役割をきめたり観客も数名誘ってきて結構おもしろくそれらしく劇をしていることもあるし、ある場合には幼稚園ごっこ・白鳥ごっこなど題をつけて、観客はあってもなくてもよし、場所も自由自在、話の運びもその時その時の

出たとこ勝負のあそび、私たちはこれをごっこあそびとみなしているけれど、これも子どもたちにとっては劇あそびの一種である。男の子たちが隊長をきめて庭中を歩きまわるアフリカ探検ごっこでさえも、彼らに言わせれば「これ劇やってるんだよ」という解釈なのである。

また、教師の側からでた劇あそびとしては、音楽リズムのときに教師が一連のつながりをもった曲をひき、その情景をこぼで補充したりしながらよくするリズムあそびも初歩的な劇あそびであり、この際もしお面などをつければ子どもたちは一そう劇あそびをしたのだという気持を強くもつであろう。秋のお山のあそび・遠足ごっこ・動物村のあそび・サンタクロースのあそびなどはリズムあそびとして脚色していきやすい題材であろう。それから、教師が話をきかせる・紙芝居をする・音楽劇のレコードをきかせるなどして、それをもとにして進めていく劇あそびも保育の計画の中によくとり入れられている。いずれの場合にも、配役はなりたいたい役をかわりあってやるし、何人でもやれるという特性をもっているし、お面や小道具は簡単なものをつくる場合もあるし、なしですます場合もある。せりふは音楽が中心になるからあえて入れなくてもよいし、話をしたい場合にはこぼを入れるといった程度のものである。

いろいろ日常幼稚園で扱われている劇あそびについて書いてきた

〈幼稚園の時期にどれだけのことを期待できるか〉

が、いずれも要約してみれば「即興劇」または偶然劇とよんでもよいようなもので、やって楽しむことが主体となった劇あそびなのである。こうやって行なっている劇あそびは見せるためにするのでなく、幼児の自己中心性をよい意味で、活用したあそびなのであるから、自分たちは楽しくあそび興じ「劇」をしたつもりでいても、筋というものを考えればどうみても順序よく手際よく運ばれたものではないに違いない。しかし、幼稚園の劇というものはあくまでもやることを楽しむ段階におくのが本体であるから、これはこれでよいのであり、子どもにとって大切な必要経路であると思う。

さて、こうやって生活の間に劇あそびは深く浸透しているのであって、三月のこの卒業期前にした子どもたちはすでに劇あそびに関するレディネスができているといおうか、劇あそびをやるとういうその意識ができて上っている段階に到達していると考えられるのである。とは言っても、級の中の全ての子どもにこれが当てはまるというのはいすぎであろう。それは活発な子どもたち、発展的あそびの巧みな子どもたちに多くみられるのであって級の中にはまだその段階にいたっていない子どももいるであろうことも考慮に入れねばならないのであって、その子どもたちにも無理なく楽しく今回の劇あそびができるように進めていくということを、この際も教師として忘れてはならないと思う。

こうしてやりたい意欲の盛んな子どもたちにもそれを存分にやらせ、またそれ以前の状態の子どもたちも楽しくできるようには、どうやって劇あそびを進めていったらよいであろうか。そして更に、今回のそれは今までの劇あそびのように級の中で代りあってやって楽しむということを中心としたものとは少しかわって、もう一つ、見る人たちも楽しくということも考えに入れなくてはならない。自分たちはやっていて心ゆくまで楽しく過ごせたとしても、見る側にとって何やらさっぱりわからなかったりおもしろくなかったりするならば、せっかく会を催してお客さまをよんで一日を過ごすということの意味がうすれてしまうのではないだろうか。やって楽しく、小さい人たちもみてよくわかりおもしろくという面からは、わかりやすく単純なもので、明るく楽しいものであることが条件となってくるであろう。

— ☆ — ☆ — ☆ —

こうしたことをいろいろ考え合わせた結果、その話の起伏の複雑さの頃は、年長児の劇あそびにむくのではなからうかということと、童話自体の有名度からは年少の子どももストーリーを知っているということ、「金のがちょう」という童話を選び脚色してみた。

この童話はスライドにもあつて園全体の集りの誕生会するときなどに
映写すると、特に喜ばれるものの一つであつたが、さて劇あそびと
してうまく運べるかどうかはまた別である。ともかくもやってみる
ことにした。くりかえすようになるけれど、幼稚園の劇であるから
やはり全体の進行は、音楽が中心になることはこの場合もあてはま
る。そこでまず第一に、曲の選択は教師の役割であるからこれにと
りかかることに専心した。それから劇をわかりやすくすることと、
発表力を伸ばす機会としていくことなどからせりふもある程度入れ
ることにした。せりふの方はこちらに大体の下案はもっていたが、
それを最初から出さないで子どもたちに考えてもらうようにした。

話の筋を追つてみなくていくうち、似たような場面のくり返
し、例えば三人の兄弟が順番に森へ出かけるときにお母さんとかわ
すことばは、弟は前のお兄さんと同じことを言うのがよいという意
見が出て、やる方はおぼえやすいし、見る方もわかりやすいとい
うことからとりあげられると、宿屋の姉妹が金のがちょうの羽をほし
がることも妹はお姉さんと同じことばでよいという話し合いにな
つたりした。

配役は、やりたい役を代りあつてやるといういつもの方法から入
つた後、一応役をきめて落ちつける段階になると教師はまたも頭を
なやますのであつた。というのは、無理がなくなつてうまくいくとい

点を考えれば、適材適所というやり方で教師がその子どもにあつた
役を配分することになるであろうが、しかしこのやり方はある意味
ではせっかく、自分たちで劇をしようという気持が芽生えているの
に、それを伸ばすことをせずに教師から与えられるものを待つ保育
へと逆流する傾向がある。それなら子どもにやりたい役をやらせれ
ばどうだろう。この場合はやりたい役を自分で選択しそれが當つた
ものはそれで満足するであろうが全体のバランス、そして他の催し
ものどふりあいという面では、うまくいかない場合もある。あるい
は、級の中の子ども同志のせいせんという方法もあるが、これは一
見民主的なようであるけれど、級の中の人望の高い子どもによい役
が集中してしまうようなことにもなりかねない。そして劇あそびは
どこまでもあそびとしてとり扱われる反面、そのもつている内容と
して言語指導の大切な意義をもつものであるから、やはりこの機会
もその面をしっかりと指導していきたいと思うし、普段は引っこみ思
案な傾向をもつ子どもが大勢の前でよく発表してそれによつて自分
自身も、自信をえていくようなきつかけになることも考えられるの
で、あなたが子どもにばかり役を選択させることのみが最上とは言
いきれないであろう。友だちの前で、発表することによつて子ども
は、自分が大勢の子ども、友だちにどのように見られているか、ど
のように評価されているかという自我意識が高められるし、またい

〈幼稚園の時期にどれだけのことを期待できるか〉



*
*
*

つもおとなしいと思われがちな子どもがはつきりとした語調で話をしたならば、友だち間の評価がそれによって高められるに違いない。あるいはまた、日頃交友関係があまり円滑にいかないで困っているような子どもには、友だちと気持を合わせて楽しくやっていく劇あそびを通して、協調性を高め社会性を伸ばすよい機会になるで

あろう。このようなことを考え合わせるなら、教師が配役を考慮するということも場合によっては必要となつてこよう。種々なことを思いまどつたが、結果的にはいろいろなやり方をみなが組み合わせていった。自他すいせんもしたし、ある子どもには教師がすすめてもみだし、やりたい役を鉢合わせしてゆずらぬ場合は

じゃんけんもした。ひょうきんで名をうっていたある男の子には満場一致でこびとの役がさずかったし、お姫さまは志望者が多くて何回戦かのじゃんけんの後やっと落ち着いたものであった。

さて、こうしてやりはじめてみるとせっかく苦心して選んだ曲があまり適切でなくまたもや楽譜めぐりで教師は頭をかかえてしまっても、子どもの側は結構演技者としての意識をもち、てれながらも一生けんめいそのしぐさをしたり、せりふの方は一応考えていても忘れてしまえばそれにこだわらず得意即妙、アトリブをきかせてなかなか愉快な場面がみられた。そして扮装はいつもはあまり衣裳を用いずに過ごしてきたが、今回はお面を用いなので雰囲気を出すために何かと考えあぐねているうちに、ハンスはチロリアンハットをかぶったり、牧師さんは黒のどっくりのセーターに十字架をぶら下げたり、宿屋の娘たちや王妃さまなどはお母さまお姉さまのスカートをかりたりネックチーフをかぶったりなどしてありあわせばかりであるけれど、楽しい劇のよそおひも整えられていった。

そしていよいよ当日の三月三日、やはり本番となると普段落ちつきはらって自信たっぷりだった者も大勢の観客の前では上ってしまつて頭のとっぺんから声を出したりの場面もあったが、それもまた子どもらしいおあいきょうと大笑いになったりしたものである。

何事によらず頭の中でねっている時と実際とのずれは、保育計画の際にもしばしば起るが、今回も始めにこちらの腹案としてもつていたものとは多少こととなったこともあるが、これは教師が子どもの意見をとり入れたり、子どもに適したものとしていこうとする際には必要な改訂であると考ええる。それからこの劇あそびのときは一人で一役をし、せりふも短いけれど一人でいうことが多かったが、これはどこまでも卒業期の子どもを対称とした劇あそびに扱われる形であり、発表の基礎のまだないときや、もっと単純な形の劇あそびの経験もまだもないときには困難度が強いからあまり好ましいとは考えられない。そして更に、教師と子どもがお互いに気心を知りつくした時期には、みなで一生けんめい気持を合わせてすることは、お互いがその努力によって楽しさを得るだけでなく、親しさの度合も一そう強まるものだと知ったのであった。

(お茶の水女子大学付属幼稚園)

* * * * *